薄く書く和歌（続）

―『源氏物語』朝顔・藤壺の「ほのか」、「墨つきまぎらはす」―

朴＊　英美

はじめに

『源氏物語』には作中人物の筆跡に関する多様な表現が見られるが、本稿では、その中でも墨色の濃淡に関する表現を取り上げて考察する。これらは、おもに女君たちの綴った手紙の文字に関する記述に現れ、相手に心を許しきれず、和歌の言葉ではありのままに伝えられない彼女たちの心情を、しばしば鮮明に表している。前稿では、「ほのか」という語が示す墨色の薄さが、女君の心情を表す一種の「ことば」として用いられていることを、玉鬘の三例を中心に論じた。(注1)

本稿では、まず、玉鬘以外に「ほのか」な墨の色を用いて女君が和歌を書いた例、朝顔の姫君の二例と藤壺の一例について考察する。次いで、墨の濃淡に関わる表現として「（墨つき）まぎらはす」について取り上げ、明石の君の一例、前斎宮の一例を考察する。さらに、類似する五節の君や夕顔の例にも言及する。女君たちがなぜ墨の色を調節したのか、それによって何を表現したかったのかについて論じたい。

一　「薄く書く」―玉鬘

朝顔の姫君と藤壺の「ほのか」な筆跡を論じる前に、前稿での考察を必要な範囲でふり返っておく。「ほのか」（形容動詞「ほのかなり」の語幹）は『源氏物語』に一三八例ある。人の姿や光などの見え方の描写や、楽器の音などが聞こえる場面に多く現れる他、花草木の様子、知識の程度や楽器演奏の技量などの表現にも用いられる。これらの「ほのか」は、何らかの量の少なさや程度の低さを表す点で共通するが、ただし、「ほのか」の前後には美しく、印象に残ることを描いた記述が多いことから、単に量や程度を示す語ではなく、美的概念の表現とも考えられる。

『源氏物語』には筆跡に関わる「ほのか」が七例あり、そのうち二例は「墨つきほのかに」「ほのかなる墨つき」とあって、文字の墨色が薄い様子を表す。「墨つき」とない他の五例も墨色の薄さと諸注で解され、稿者もそれに従う。前稿では、そのうち四例について、筆跡は言葉であるとする石川九楊氏の説(注2)を手がかりに考察した。

雨夜の品定めの「はじめの難」の女性は、手紙を書く時に曖昧な言葉を選び、「墨つきほのかに心もとなく思はせつつ、またさやかにも見てしがなとすべなく待たせ」（帚木①六二）のように、薄い墨色で文字を綴ることで男性の心をじらすという。『源氏物語』は筆跡に意図が込められることに自覚的である。

玉鬘には「ほのか」な筆跡が三例ある。玉鬘は自身の知性を試す源氏との最初の和歌の贈答で、二人のつながりの確認を求める贈歌に対し、同意を拒みつつわが身の憂さを詠む返歌を、「ほのか」に書く（玉鬘③一二三～一二五）。田舎育ちで自信のない玉鬘は、筆跡の欠点が目立たないように薄く書いたと解せる。その意味で、薄い墨色は、「私の欠点を見ないでほしい」という「ことば」である。さらに、文字の弱々しさには、歌意の自己否定性を強めるとともに贈歌への反発を弱める意図も読み取れる。

また、恋情を訴える蛍宮の端午の歌に対し、玉鬘は、恋情があやめの根のように現れてこそいっそう浅く見えると反発的に切り返す歌を「ほのか」に書いた（蛍巻③二〇四～二〇五）。源氏の懸想に悩む玉鬘の状況を前提にすれば、女性が反発的に返歌をするのが恋の贈答歌の常套であるだけに、薄い墨色には、歌意とは逆の「自分に関心を持ち続けていてほしい」という「ことば」が読み取れる。

三例目も蛍宮との贈答歌である。玉鬘の尚侍出仕が迫り、蛍宮は恋を訴える歌を贈る。玉鬘は自ら「あなたを忘れはしません」という歌を「ほのか」に書いた（藤袴③三四四～三四五）。出仕を控えた状況をふまえれば、玉鬘は歌意だけが強調されないように文字を薄く書いたと解せる。薄い墨の色は「期待しすぎないでほしい」との「ことば」と読める。

玉鬘の「ほのか」な筆跡は、書の技量の未熟さを隠すために用いる場合があるが、

〔キーワード〕『源氏物語』／筆跡／薄く書く／ほのか／墨つきまぎらはす

＊平成一九年度入学　比較社会文化学専攻

それだけでない。一方で自己否定的な歌の意味を強調し、また一方で反発にしても愛情の肯定にしても他に向かう歌の意味を弱めるために淡い墨色を用いていると、前稿では論じた。玉鬘の「ほのか」な筆跡がもつ意味の解釈を、朝顔と藤壺の「ほのか」な筆跡、さらには、「ほのか」と類似する「墨つきまぎらはす」の分析に応用したい。

二　「薄く書く」―朝顔

ここでは朝顔の姫君の筆跡について取り上げる。物語中に朝顔の和歌は七首あり、手紙に書かれた五首のうち、その筆跡を「ほのか」と表現したものがここで取り上げる二首である。

Aなほいみじうつれづれなれば、朝顔の宮に、今日のあはれはさりとも見知りたまふらむと推しはからるる御心ばへなれば、暗きほどなれど聞こえたまふ。絶え間遠けれど、さのものとなりにたる御文なれば咎なくて御覧ぜさす。空の色したる唐の紙に、

（源氏）「わきてこの暮こそ袖は露けけれもの思ふ秋はあまたへぬれど いつも時雨は」とあり。御手などの心とどめて書きたまへる、常よりも見どころありて、「過ぐしがたきほどなり」と人々も聞こえ、みづからも思されければ、

（朝顔）「大内山を思ひやりきこえながら、えやは」とて、

（朝顔）秋霧に立ちおくれぬと聞きしより しぐるる空もいかがとぞ思ふ

とのみ、ほのかなる墨つきにて思ひなし心にくし。（葵②五七～五八）

葵の上の死後、左大臣邸で喪に服す源氏が朝顔に手紙を送る。源氏は和歌で、何度も経験した秋であるが今日は格別涙に暮れていると、葵の上を亡くしたことで感じる人生の無常さをさりげなく表現する。源氏の手紙を読んだ朝顔も自ら返事をする。

朝顔は、「秋霧」で葵の上を表し、「秋の霧が立つ頃、（葵の上に）先立たれたと聞いて以来、（早くも）時雨が降る時節ですが、この空の雨のようにどれほど涙を流しておいでのことかと思っています」という和歌を薄い墨色で書いた。これは、物語中で最初の朝顔の和歌である。この和歌について「朝顔の姫君は、光源氏の傷心を思いやる気持ちだけを述べ、その気持ちが薄い墨跡においても表現されているとそう思うせいか光源氏は（略）「心にくし」と思う」[注3]という解釈もある。『孟津抄』は「一筆そとあそはしける」と注する。『孟津抄』は途中で墨継ぎせずに歌を書いたと解釈するようであるが、しかし、「ほのかなり」の語義が「量や程度が少ない状態の描写」であることから、朝顔は最初から薄い墨の色で手紙を書いたと解釈するほうが妥当であろう。そして、前稿の結論を応用すると、「ほのか」な薄い墨色は、歌意に沿った「思いやり」や「慰め」の表現ではなく、むしろ歌意とは相反する心情の表現と解せる。

物語の中で朝顔は源氏の求愛を拒み続けるが、Aの歌にそうした態度は見られない。Aは葵の上を失った源氏の心情を理解するような和歌である。その墨色の薄さには源氏への好意の表明を抑制する意図が読み取れる。朝顔は歌では源氏の心情に寄り添いつつも、文字の薄さという「ことば」によって源氏との適度な距離を作り出したと解せる。その「ことば」は「人生の哀惻には共感できますが、それ以上にあなたを思うことはありません」と読み取れる。こうした「ほのか」な文字の使い方は、出仕を前にした玉鬘が蛍宮の恋情に肯定的な返歌を書いた際、歌意が強調されすぎないよう文字を薄くしたことと酷似している。

Aの後に「つらき人しもこそと、あはれにおぼえたまふ人の御心ざまなる。つれなながら、さるべきをりをりのあはれを過ぐしたまはぬ、これこそかたみに情も見はつべきわざなれ、…」（葵②五八）と語られる。源氏は自身に冷たい人に心惹かれる性質であり、ふだんはそっけないものの、然るべきやり取りはあるという関係でこそ、長く思い合えると、朝顔を評価する。源氏は朝顔から肯定的な返歌を得ていながら、「つらき人しもこそ」と朝顔の心が自身に向いていないことを自覚する。このような叙述が続くことは、朝顔が文字を「ほのか」に書いた理由が、源氏との間に距離を置くためだと解する根拠となる。作者が物語で最初に現れる朝顔の歌を「ほのか」な墨色で書かせたことは、源氏の求愛を生涯拒み続ける朝顔の人物像を描くにあたり、象徴的な意味を持つといえる。

次に梅枝巻の朝顔の和歌を取り上げる。

B前斎院（＝朝顔）よりとて、散りすきたる梅の枝につけたる御文持て参れり。（略）沈の箱に、瑠璃の坏二つ据ゑて、大きにまろがしつつ入れたまへり。心葉、紺瑠璃には五葉の枝、白きには梅を彫りて、同じくひき結びたる糸のさまも、なよびかになまめかしうぞしたまへる。（蛍宮）「艶なるもののさまかな」とて、御目とどめたまへるに、

（朝顔）花の香は散りにし枝にとまらねどうつらむ袖にあさくしまめや

ほのかなるを御覧じつけて、宮（＝蛍宮）はことごとしう誦じたまふ。（略）（源氏）「何ごとかははべらむ。隈々しく思したるこそ苦しけれ」とて、御硯のついでに、

（源氏）花の枝にいとど心をしむるかな人のとがめん香をばつつめど
とやありつらむ。
（梅枝③四〇五～四〇七）

明石の姫君の東宮参入の準備として、源氏は親しい人々に香の作成を依頼した。源氏の弟蛍宮が六条院を訪れている時に、朝顔から香に添えてわずかに散り残る梅の枝と手紙が届く。心葉に添えられた朝顔の歌[注4]は、「花の香りは、散ってしまった枝には残っていませんが、これから香りを移す（お方の）袖には、深く薫ることでございましょう」という。盛りを過ぎた自分には魅力などないものの、姫君はこれから素敵な女性になるだろうの意である。

鈴木日出男氏は、女歌の発想の根源には否定的な契機があり、それが「対人性に執する場合に、相手を言いまかそうとする切り返しのひびきが強まり、逆に自己に執する場合には、孤独な内容や悲哀の心象風景の色彩が強められる」[注5]とする。

朝顔の歌は明石の姫君に対する言祝ぎでありながら、その上の句は「自己に執する」内容で、これは単に明石の姫君を祝うためなら必要ないものであろう。薄い墨色による朝顔の筆跡は、「盛りを過ぎた自身」の孤独と悲哀の色彩を強化する。

源氏の返歌からも考える。源氏は、朝顔を「花の枝」とし、「花の枝にますます心惹かれます。あなたは人が見咎めると思って香を隠していますが」と返歌した。このように源氏は「花の枝」である朝顔にいっそう心引かれるとし、朝顔をたたえる。この二首には、「私にはもはや存在価値がありません」「そんなことはありません、魅力的ですよ」という会話の呼吸がある。薄い墨の色は「私の女性としての価値はもうありません」の意を強調する「ことば」として働き、「いとど…かな」という源氏の返歌の上の句の強い調子を導いたと読み解ける。

三　「薄く書く」―藤壺

紅葉賀巻での藤壺の筆跡に関する叙述を取り上げる。

C御前の前栽の何となく青みわたれる中に、常夏のはなやかに咲き出でたるを折らせたまひて、命婦の君のもとに書きたまふこと多かるべし。

（源氏）「よそへつつ見るに心は慰まで露けさまさるなでしこの花
花に咲かなんと思ひたまへしも、かひなき世にはべりければ」とあり。さりぬべき隙にやありけむ、御覧ぜさせて、（命婦）「ただ塵ばかり、この花びらに」と聞こゆるを、わが御心にも、ものいとあはれに思し知らるるほどにて、

（藤壺）袖ぬるる露のゆかりと思ふにもなほうとまれぬやまとなでしこ
とばかり、ほのかに書きさしたるやうなるを、（命婦ハ源氏ニ）喜びながら奉れる、例のことなれば、しるしあらじかしとくづほれてながめ臥したまへるに、胸うちさわぎていみじくうれしきにも涙落ちぬ。
（紅葉賀①三三〇～三三一）

誕生間もない若宮と宮中で対面し、自邸二条院に戻った源氏は常夏の花を折り、藤壺への手紙を命婦の君に託した。源氏は、撫子の花を若宮と思って見ても心はなごまず涙に濡れると詠み、若宮の美しい成長を願っても二人の仲は甲斐のないものと嘆く言葉を添えた。命婦はわずかでも返事を書くよう勧め、藤壺は「袖ぬるる～」の歌を「ほのかに」書いた。

藤壺の歌は周知のように「袖」および「ぬ」の解釈をめぐって説が分かれる。「袖」については、藤壺の歌を単独で読めば「袖」は詠歌主体（藤壺）のそれと読めるが、ここは贈答歌なので贈歌の「露けさまさる」に応じた「源氏の袖」と解するのが適切と考える。しかし、難問は「うとまれぬ」の「ぬ」は打消か完了かの解釈である。現代の『源氏物語』研究におけるこの難問に対し、本稿では新説を提示する用意がない。筆跡表現が心情表現となるとの観点から、完了説、打消説の双方に即して、「ほのか」の働きを考察する。

まず『集成』『新全集』『新大系』など現代の諸注で優勢の説である完了説に即して考える。完了説をとる研究論文は、源氏との不倫関係による藤壺の葛藤や、「時鳥汝が鳴く里のあまたあればなほうとまれぬ思ふものから」（古今集・夏・よみ人知らず）など『源氏物語』以前の平安時代の和歌を根拠とする。[注6]また、王権の問題を中心に論じる中で、藤壺の歌の「ぬ」を完了と判断する説もある。[注7]

完了説では、藤壺歌は、「あなたの袖を濡らす（涙の）露に縁の深いものだと思うとまさに、やはりこの大和撫子―若宮―をいとしく感じられないと思ってしまう」の意となる。こうした和歌を藤壺が薄い墨で綴ったのは「あなたにゆかりの我が子が疎ましい」との意味を弱めるためと解せよう。そうした墨色の用い方は玉鬘の「ほのか」にもあった。藤壺は「疎ましい」と詠みながらも、それを「ほのか」に書くことで、歌の内容とは相反する心情を表現し、さらに、途中で筆を止めたような書きぶりで、はっきりとは言えない心情があることを表した。藤壺の淡い墨色は「いとおしい若宮」との「ことば」として読み取れる。藤壺が和歌とその書きぶりの組み合わせによって若宮への愛情をも表現したとすると、源氏が涙したのは、思いがけず返事が得られたことに加え、そうした藤壺の心情に触れたからだとも考えられる。

次に、本居宣長の「四の句、猶うとまれざる也」（『源氏物語玉の小櫛』）など以来の、打消説に即して考察しよう。打消説では、鎌倉時代の俊成女が藤壺の歌を本歌取りし、「咲けば散る花の憂き世と思ふにもなほうとまれぬ山桜かな」（続後撰集・春下）と、「ぬ」を打消で詠んだことが有力な根拠になる。打消説は『源氏物語』より後の時代の和歌を根拠に挙げる場合が多い。[注8] 打消説では、藤壺歌は「あなたの袖を濡らす（涙の）露に縁の深いものだと思うと、やはり愛おしいこの大和撫子―若宮―」の意となる。我が子への愛情の歌を藤壺はなぜ「ほのか」に書いたのだろうか。

藤壺の筆跡に関し、山崎和子氏は、「結果として現れ出たものは、墨色を押さえるという行為であったかも知れない。しかしそれは、わが子への愛情を抑制し、葛藤し逡巡しつつもわずかに語られ出た藤壺の心を示唆するものであったと思われる」と指摘する。[注9] また、加藤睦氏も藤壺の複雑な心の一端がかすかに表れているとし、「和歌の後に、語り手が「ほのかに書きさしたるやうなるを」と述べているのは、こうした事情に対応した言葉である」という。[注10] 吉見健夫氏は「藤壺の歌は（略）「ほのかに書きさしたるやうなる」と、いかにもはかない書きぶりだとされるが、それは、答歌を求めた命婦の言葉「ただ塵ばかり」（略）に対応しており、秘事に関わる危険な贈歌にかろうじて応じたさまを表す」[注11] と述べる。

藤壺の歌は一首の内にすでに葛藤を含むが、右のような諸氏の指摘を参照しつつ、本稿のここまでの考察をふまえて考えたい。和歌の言葉が「なでしこ」＝若宮への愛情の肯定だとすると、「ほのか」な墨色には、それと相反する女君の心情が込められていると読める。それは「若宮を手放しでいとおしむことはできない」という「ことば」として解せよう。藤壺は、Aの朝顔のように源氏との間に距離を置くために薄い墨で書いたと考えられる。

藤壺の和歌の言葉自体が多義的で曖昧だとは考えない。作者はどちらかの意で藤壺に詠ませたのであろう。それにしても、現代の読者にとっては、うとましい、うとましくない、の両極の間で歌意を決めがたいが、そのどちらであるにしても、歌意を弱めて調整する表現として、薄い墨色という筆跡表現があると考える。和歌の言葉だけでは表現しきれない女君の心の揺れ、その揺れ幅が物語に書き込まれているのだということが本稿の主張である。

四「墨つき紛らはす」筆跡―明石の君と前斎宮

「ほのか」以外に文字を墨の色に関する表現として、次に「墨つき紛らはす」について考察する。『源氏物語』中に「まぎらはす」は八六例見られる。[注12] それらは「かくす」「ごまかす」「気分を晴らす」などの意味として使われる。最も多い例は、悩みや悲しみがあり、それを忘れるために他のことに心を移すことを表す例である。具体的な例を見ると、「はかなき古歌、物語などやうのすさびごとにてこそ、つれづれをも紛らはし、かかる住まひをも思ひ慰むるわざなめれ」（蓬生②三三〇）のような例が、私が数えたところでは一七例あった。

「（紫の上八）柱隠れにゐ隠れて、涙を紛らはしたまへるさま、なほここら見る中にたぐひなかりけりと、思し知らるる人の御ありさまなり」（須磨②一七三）のように涙や顔を隠す場合が一二例見られる。また、言い訳で取り繕う様子を表す例が一二例見られる。具体的には、元日の夜に明石の君の部屋に泊まった源氏が公卿や親王たちへの新年の挨拶を理由に紫の上と対面しない例「今日は臨時客のことに紛らはしてぞ、おもがくしたまふ。上達部、親王たちなど、例の残るなく参りたまへり。」（初音③一五一）などがある。また、装う、誤魔化すことなどを表す例が一一例ある。具体的な例は、「（源氏八）鴨の卵のいと多かるを御覧じて、柑子、橘などやうに紛らはして、わざとならず奉れたまふ。」（真木柱③三九四）と、玉鬘が懐かしくなった源氏が、鴨の卵を飾り、父親からの何でもない時候の便りのように装った場合などがある。

「いとわりなう聞き苦しと（玉鬘ガ）思いたれば、いとほしうて、のたまひ紛らはしつつ、（源氏）「内裏にのたまはすることなむいとほしきを…」」（真木柱③三五五）のように話をそらす場合が八例見られる。また、「かの昔おぼえたる細殿の局に、中納言の君紛らはして入れたてまつる。」（賢木②一〇五）のように人に目立たないよう行動する例が六例ある。また、後述するように書くことに関する表現が七例ある。そして、少数ながら、知らぬふりをすること、音楽、世話をすること、手紙を書くこと、修行の邪魔をすること、普段の素顔、時間を過ごすことなどに関する表現の例もある。

このように「まぎらはす」は、人物がある目的を達成するため、他人に認識されないよう工夫する際の表現として用いられていることに注目したい。「近き御寺、桂殿などにおはしまし紛らはしつつ、いとまほには乱れたまはねど」（薄雲②四四一）と、源氏が明石の君を訪ねる際、寺や桂院を訪問するかのように装う場面は、こうした「まぎらはす」の特徴が顕著な例である。

書くことに関わる「まぎらはす」は、「そこはかとなく書きまぎらはしたる」（夕顔①一四〇）、「手はあしげなるを紛らはし」（夕顔①一九一）、「墨つき濃く薄く紛らはして」（明石②二五〇）、「墨つきなど紛らはして」（澪標②三一六）、「さかしらに書き紛らはしつつ」（朝顔②四七七）、「紛らはし書いたる濃墨、薄墨」（少女③六三）、「いと苦しげに言ふかひなく書き紛らはしたまへるさま」（夕霧④四三三）の七例がある。この七例の中でも、手紙のやり取りに和歌が書かれ、墨の色に関わる表現「（墨つき）紛らはす」とある、明石の君一例と後に秋好中宮となる前斎宮の一例の二例を本節で取り上げる。はっきりしない墨の色を意図的に用いることにより、女君たちが何を表そうとしたのかを考察する。類似した表現として、五節の君の「紛らはし書く」も取り上げ、夕顔の「紛らはす」と源氏と落葉の宮の母一条御息所の「書き紛らはす」にも触れる。単に筆跡の欠点を誤魔化す軒端荻の例「手はあしげなるを紛らはし、さればみて書いたるさま品なし」（夕顔①一九一）や、文面の内容のみを表す例「（源氏ト朝顔トノヤリトリヲ書キ記スモノノ）さかしらに書き紛らはしつつおぼつかなきことも多かりけり」（朝顔②四七七）については、取り上げない。

次は、明石巻の明石の君の例である。

Dまたの日、（源氏）「宣旨書きは見知らずなん」とて、

（源氏）「いぶせくも心にものをなやむかなやよやいかにと問ふ人もなみ

言ひがたみ」と、この度は、いといたうなよびたる薄様に、いとうつくしげに書きたまへり。（略）めでたしとは見れど、なずらひならぬ身のほどのいみじうかひなければ、なかなか、世にあるものと尋ね知りたまふにつけて涙ぐまれて、さらに例の動なきを、せめて言はれて、浅からずしめたる紫の紙に、墨つき濃く薄く紛らはして、

（明石）思ふらん心のほどややよいかにまだ見ぬ人の聞きかなやまむ

手のさま書きたるさまなど、やむごとなき人にいたう劣るまじう上衆めきたり。

（明石②二四九～二五〇）

須磨から明石へ移った源氏は、入道の娘である明石の君と文を交わす。「墨つき紛らはす」は源氏の二度目の手紙に対する明石の君の返事に現れる。源氏の贈歌は言葉を交わす相手のいないつらさを言う。明石の君は返事を書こうとしなかったが、周囲に責められ、「私を想っているというあなたの心は、さあどの程度でしょうか。まだ逢ってもいないあなたが、噂を聞いただけで苦しむでしょうか」という歌を「墨つき濃く薄く紛らはして」書いた。

明石の君の返歌について、鈴木日出男氏は、「もちろん、この切り返しの発想は、源氏その人への拒否を意味してはいない。むしろ、反発を旨とする女歌の、典型的な表現とみられるであろう。（略）源氏の切ない懸想の贈歌と、それをさりげなく切り返す明石の君の返歌の間には、たがいに心をふれあわせる呼吸が息づいている」[注13]と指摘する。また藤井貞和氏は、「才気のある、若い張りをきかせたこの返歌は源氏を魅きつけるものを秘めて物語のなかに置かれた、と見たい。「まだ見ぬ人の」の一句は男をさそう」[注14]と指摘する。これらは和歌の言葉の意味からその働きを解した理解として適切であるが、本稿ではこうした和歌と組み合わされる筆跡に込められた女君の心情を読み込みたい。

「墨つき濃く薄く紛らはして」は、部分的に、紫色の紙に溶け込んで見えにくいほど薄い箇所があり、読みにくく書かれていることをいうと解せる。「手のさま…やむごとなき人にいたう劣るまじう上衆めきたり」とあるように、濃淡の変化は結果的には美的表象となるが、[注15]読みにくく書く意図はまた別にあると言えよう。前述した「まぎらはす」の考察からも意識的に工夫された筆跡と考えられる。

前後の文脈に根拠を求めつつ解釈する。明石の君が、父入道から源氏の最初の手紙に返事を書くよう勧められた場面に、「内に入りてそそのかせど、むすめはさらに聞かず。いと恥づかしげなる御文のさまに、さし出でむ手つきも恥づかしうつつましう、人の御ほどわが身のほど思ふにこよなくて、心地あしとて寄り臥しぬ。言ひわびて入道ぞ書く」（明石②二四八）とある。明石の君は、返事を書くことを思うと、自身の筆跡（「手つき」）が恥ずかしく、強く拒否した。Dの「墨つき濃く薄く紛らはして」は、この「さし出でむ手つきも恥づかしうつつましう」に対応しよう。

Dの後には、「女はた、なかなかやむごとなき際の人よりもいたう思ひあがりて、ねたげにもてなしきこえたれば、心くらべにてぞ過ぎける」（明石②二五一）とある。明石の君は、やはり源氏に容易になびかず、文を書こうとしない。Dの「濃く薄く紛らはし」た筆跡について、『新全集』は「源氏の真意を測りかねて悩んでいる意の返歌にふさわしく、その筆跡も濃淡の変化をつけて自らの心情の不安と動揺を暗示した」とする。しかし、「まぎらはす」の語義と前後の文脈から考えれば、「不安と動揺」の暗示よりも、何らかの意図があって墨の色を変化させたと考えられる。

明石の君は、女歌の作法に従って反発的な和歌を詠むが、自筆で歌を書くことで、源氏との交流が始まることも知っている。明石の君は墨の色を変化させることで、源氏に対し心を開いていないことを表す。その筆跡は「私はあなたと交際を望みません」

という「ことば」と解せる。

次に、澪標巻の一節を取り上げ、「墨つきまぎらはす」についてさらに考察したい。

E雪、霙かき乱れ荒るる日、いかに宮のありさまかすかにながめたまふらむと思ひやりきこえたまひて、御使奉れたまへり。（源氏）「ただ今の空を、いかに御覧ずらむ。

降りみだれひまなき空に亡きひとの天かけるらむ宿ぞかなしき」

空色の紙のくもらはしきに書いたまへり。若き人の御目にとどまるばかりと、心してつくろひたまへる、いと目もあやなり。宮はいと聞こえにくくしたまへど、これかれ、「人づてには、いと便なきこと」と責めきこゆれば、鈍色の紙のいとかうばしう艶なるに、墨つきなど紛らはして、

（前斎宮）消えがてにふるぞ悲しきかきくらしわが身それとも思ほえぬ世につつましげなる書きざま、いとおほどかに、御手すぐれてはあらねど、らうたげにあてはかなる筋に見ゆ。　（澪標②三一五～三一六）

六条御息所が亡くなり、雪と霙が降り乱れた日、源氏は、御息所と故前坊との娘、前斎宮のことが気がかりになる。前斎宮を心配する源氏の手紙は、今の空の色に合わせて曇りをおびた紙に書かれ、まばゆいほどにすばらしかった。前斎宮は返事を書きがたく思ったが、周囲に責められて鈍色の紙に書いた。前斎宮は「雪や霙が消えそうもないほど「降る」の「ふる」ではありませんが、世に「経る」、生き長らえているのが悲しく思われます。この空のように目の前がまっ暗になり、自分が自分だとも思えない現世で」と返歌した。贈歌と共有する言葉は「降る」と「悲し」である。前斎宮を思いやる源氏の贈歌に対し、否定的に自己に執して生きていることが悲しいと詠む。

「墨つきなど紛らはして」について、『新大系』は「ほのかにかけるさま也。さのみ墨くろにかくは、ほめぬ事といへり」との『万水一露』説を引く。『新全集』は「筆跡を濃く薄く、料紙の鈍色に配合させる」と注する。これらのように、「濃く薄く」という言葉はないが、明石の君の例を参照すれば、「墨つき紛らはす」は墨色の濃淡について書いたものと解せる。後述するように、五節の君の場合にも墨の濃淡と「紛らはす」が結びついている。

Dの明石の君の場合と同様、Eの前斎宮も、源氏への返事を書くまで時間がかかり、周囲に要請されて書いている。Eの前に「宮には、常にとぶらひきこえたまふ。やうやう御心静まりたまひては、みづから御返りなど聞こえたまふ。つつましう思したれど、御乳母など、「かたじけなし」と、そそのかしきこゆるなりけり」（澪標②三一五）とある。気が進まない中、促されて書く場合の具体例としてEがある。また、Eの後には、「わりなくもの恥ぢをしたまふ奥まりたる人ざまにて、ほのかにも御声など聞かせたてまつらむは、いと世になくめづらかなることと思したれば」（澪標②三一七）と、前斎宮は内気な性格で源氏と小さい声でも話すことなど考えられないという。

すらすらと明瞭に書かず、言葉を停滞させるように墨色の濃淡を取りまぜて書くことは前斎宮の消極的な意思表示と考えられる。前斎宮の筆跡は、源氏「つつましげなる書きざま」と受け取ったように、その内気な性格を現している。前斎宮は墨色を変化させ、悲しみを強調するとともに、母を苦悩させた源氏への不快感をひそやかに表明していると解せよう。源氏に返事を書く礼儀を見せつつも、墨の色で源氏への拒否感を表す。ここでは「墨つきまぎらわす」筆跡は「母のことを思うとつらく思われます」という意の「ことば」として機能している。

次に、少女巻の五節の君の和歌を取り上げる。

F殿（＝源氏）参りたまひて御覧ずるに、昔御目とまりたまひし少女の姿思ひ出づ。辰の日の暮つ方つかはす。御文の中思ひやるべし。

（源氏）をとめごも神さびぬらし天つ袖ふるき世の友よはひ経ぬれば

年月の積もりを数へて、うち思しけるままのあはれをえ忍びたまはぬばかりのをかしうおぼゆるもはかなしや。

（五節）かけていへば今日のこととぞ思ほゆる日かげの霜の袖にとけしも

青摺の紙よくとりあへて、紛らはし書いたる濃墨、薄墨、草がちにうちまぜ乱れたるも、人のほどにつけてはをかしと御覧ず。　（少女③六三）

冷泉朝での五節舞姫の儀式があった際、源氏も参内して舞姫たちを見る。源氏はかつて舞姫を務めた五節の君を思い出して手紙を送る。源氏は年月が過ぎてしまったが、忘れていないと和歌を贈る。五節の君は「舞姫だった私が霜が溶けるように、あなたにうち解けたことが今日のように思われます」と返歌した。「紛らはし書いたる」について『新全集』は「誰の筆跡か人に分らぬように」と注する。

五節の君の墨の濃淡を「紛らはす」筆跡には、「言いにくいことですが」との「ことば」が読み取れよう。明石の君や前斎宮の場合とは言い難さの質が異なるが、「言いにくいが言う」という逡巡を筆跡に表す点で共通する。

類似した表現は夕顔の筆跡にも表れる。夕顔が源氏に出会う際に贈った扇の和歌「心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花」について、「そこはかとなく書きまぎらはしたるもあてはかにゆゑづきたれば」（夕顔①一四〇）とあった。これにつ

いて『湖月抄』は「夕顔上只今忍びて爰に居給へば、此歌も夕顔やらん、官女やらんしれざるやうに、かきまぎらはしたるなるべし」と説明する。夕顔の場合は、どのように「紛らはし」たかわかりにくいが、自分の存在を隠す書き方をすることで、周りの目を気にすることなく、大胆な内容を詠むことができた。

また、源氏が柏木と女三の宮の密通の手紙を見て、自身の過去を思い出す場面に「昔、かやうにこまかなるべきをりふしにも、言そぎつつこそ書き紛らはししか」（若菜下④二五三）とある。源氏の歌は示されないが、「紛らはし」た筆跡で書くことは、自分の存在を隠す方法であることが明らかである。

そして、落葉の宮の母一条御息所が夕霧に送った手紙について「いと苦しげに言ふかひなく書き紛らはしたまへるさまにて」（夕霧④四三三）の例では、病中の一条御息所の筆跡が乱れていることを表す。右の例は「存在を隠す」の書き方ではないが、今までの「まぎらはす」と同様、「分りにくい」「読みにくい」状態であるといえる。

結論

以上、墨の濃淡を表す「ほのか」と「（墨つき）紛らはす」について論じた。朝顔は葵巻の歌では葵の上を亡くした源氏を慰める一方、「ほのか」な墨の色で源氏への好意の限界を表現する。また、梅枝巻では自己否定的な歌の内容を「ほのか」に書くことで「自己否定性」をより鮮明にした。藤壺は若宮への愛情の有無の表明を弱めるため、和歌を薄く「ほのか」に書いた。

『源氏物語』の「まぎらはす」は、本来の目的を他人が認識しにくくなるように工夫するの意を表す。その作為性を前提に、明石の君と前斎宮の「（墨つき）まぎらはす」について考えると、しぶしぶ源氏への返事を書く際の「まぎらはす」筆跡は、源氏への拒否感を表す「ことば」として用いられたと解せる。また、五節の君と夕顔は自ら男性を誘うような大胆な歌を詠みながら、その文字の濃淡を「まぎらはし」て綴ったことで、誰が詠んだのか明確にさせない。

本稿は『源氏物語』の中でも墨の濃淡に関する表現を中心に論じた。女君たちは繊細な筆遣いによって自身の感情を表しており、筆跡は女君たちの心情を表す「ことば」であることを論じた。墨の濃淡に関わる筆跡以外にも、考察する必要があるが、今後の課題としたい。

〔注〕

（1）朴英美「薄く書く和歌―『源氏物語』における「ことば」としての筆跡―」『日本文学』第六十四巻第六号、（二〇一五年六月）。

（2）石川九楊『書とはどういう芸術か（中公新書）』（中央公論新社、一九九四年）、二三～二四頁。

（3）荻野絵美「『源氏物語』における「つらき人」―朝顔の姫君の存在意識について」『滝川国文』第二九号、（二〇一三年三月）、七三頁。

（4）引用の中略部分に「御文はひき隠しつ」とあり、蛍宮が香壺の心葉を注視して和歌を見出すということから、Bの歌は心葉に添えられていたと解せる。この点で、鈴木裕子「朝顔の姫君と光源氏の和歌贈答―物語世界の地脈を探って―」（『源氏物語の展望』第八輯（三弥井書店、二〇一〇年一〇月）、三九～四〇頁）、の説に従うが、どのように「心葉に書き付けられていた」のかはややわかりにくい。

（5）鈴木日出男「女歌の本性」『古代和歌史論』（東京大学出版会、一九九〇年）、五四～五五頁、初出一九八九年。

（6）阿部秋生「藤壺の宮と光源氏（一）」『文学』第五七巻第八号（一九八九年八月）。鈴木日出男『源氏物語歳時記（ちくま学芸文庫）』（筑摩書房、二〇一〇年）、初出一九八九年。川島絹江「藤壺の和歌―『伊勢物語』の受容の方法―」『源氏物語の源泉と継承』（笠間書院、二〇〇九年）、初出一九九二年。小町谷照彦「心の中なる言―藤壺をめぐる独詠歌―」『礫』一七〇号（二〇〇〇年一二月）。鈴木宏子「藤壺宮の流儀―「袖ぬるる露のゆかりと思ふにも」―」『王朝和歌の想像力―古今集と源氏物語』（笠間書院、二〇一二年）、初出二〇〇四年。工藤重矩「紅葉賀巻「袖ぬるる」の和歌解釈―文法と和歌構文―」『源氏物語の婚姻と和歌解釈』（風間書房、二〇〇九年）、初出二〇〇七年。

（7）土方洋一「高貴さという主題―藤壺物語―」『物語史の解析学』（風間書房、二〇〇四年）、初出二〇〇〇年。藤井貞和「物語史における王統」高橋亨編『源氏物語と帝』（森話社、二〇〇四年）。

（8）吉見健夫「紅葉賀巻の藤壺―贈答歌の解釈から―」『中古文学論攷』第一七号（一九九六年一二月）。柏木由夫「「紅葉賀」の藤壺の和歌「袖ぬるる…」の解釈について」伊藤博ほか編『王朝女流文学の新展望』（竹林舎、二〇〇三年）。山崎和子「〈露〉の縁（ゆかり）の〈なでしこ〉の花」『源氏物語における「藤壺物語」の表現と解釈』（風間書房、二〇一二年）、初出二〇〇八年。加藤睦「『源氏物語』の和歌を読む（一）」『立教大学大学院日本文学論叢』第九号（二〇〇九年八月）。吉見健夫「紅葉賀巻の藤壺の歌「袖ぬるる～」の解釈をめぐって―源氏物語の和歌の表現と場面形成―」『国文学研究』第百七十三集　早稲田大学国文学会（二〇一四年六月）。

（9）山崎和子氏注（8）前掲論文、前掲書一四一頁。

(10)　加藤睦氏注（8）前掲論文、前掲誌一〇頁。

(11)　吉見健夫（8）前掲論文、前掲誌九頁。

(12)　「まぎらはす」の用例は『源氏物語語彙用例総索引』(勉誠社）と「ジャパンナレッジ」のweb検索を参考にした。また「言ひまぎらはす」のような複合語も用例に含めて考察した。

(13)　鈴木日出男「明石の君の歌」『成蹊國文』第四三号、(二〇一〇年三月)。

(14)　藤井貞和「明石の君　歌の挫折」『源氏物語入門（講談社学術文庫)』(講談社、一九九六年)、初出一九七九年。

(15)　駒井鵞静『源氏物語とかな書道』(雄山閣出版、一九八八年)、一一頁。

＊『源氏物語』の引用は、『新編日本古典文学全集 源氏物語』(小学館）によった。また、『新編日本古典文学全集』は『新全集』、『新潮日本古典集成』(新潮社）は『集成』、『新日本古典文学大系』(岩波書店）は『新大系』の略称を用いた。

Waka poems Written in Pale India Ink in *Genzi-monogatar*i (Vol.2)

PARK Youngmi

人間文化創成科学論叢 第一八巻 二〇一五年

Abstract

In this paper, I look at the relationships between *waka* poems and calligraphy in *Genji-monogatari*. For example, Asagao and Huzitsubo wrote their poems in pale India ink. By faint color, sometimes the ladies wanted to represent another feeling as opposed to words of their poems, at other times they wanted to emphasise their self-denial in their poems. The other ladies, Akashino-kimi and Akikonomu(Zensaigu) wrote their waka poems using both deep color and faint color. It could be illegible Handwriting.By writing in this way, they wanted to represent feeling of refusal. The word "Sumitsuki-magirawasu" or "Magirawasu" means writing using both deep color and faint color in *Genzi-monogatari*. Thus the act of writing in Ink-color becames an important literary technique to exquisitely represent the female poets' feelings in *Genji-monogatari*

Keywords: Genji－monogatari, Handwriting, Calligraphy, Pale india ink, Waka poems